

特集1 プリントコレクションの今

貴重書活用授業の新たな展開：
プリントコレクション活用の一例としてくらもち たかし
倉持 隆

(三田メディアセンター)

はじめに

100年を超える慶應義塾図書館の長い歴史の中で構築されてきた和漢洋の貴重書のコレクションは、古活字版や五山版などの和刻本漢籍やインキュナブラコレクションなど、非常に価値が高いプリント資料を数多く含んでいる。また、スペシャルコレクション担当が貴重書とともに管理しているアーカイブ資料にも貴重なプリントコレクションが含まれている。アーカイブ資料には、写真、拓本、選書基準では貴重書に指定されない古文書、卒業生や各界で活躍した人物の遺品、旧蔵資料、図書館の歴史資料があり、プリントであるがゆえにその存在自体が稀観である資料も多い。プリントコレクションの将来を考えると、これらの貴重書・アーカイブ資料をいかに活用していくか、ということも重要な視点の一つとなるであろう。(以下、本稿では煩雑さを避けるため、貴重書とアーカイブ資料をまとめて、「貴重書」と統一的に表記することとする。)

近年、三田メディアセンタースペシャルコレクション担当では、所蔵する貴重書について、資料保存に十分配慮しながら、積極的に利活用する方針をとっている¹⁾。文化的な遺産ともいえる貴重書を広く利活用することは慶應義塾の社会貢献にもつながるとの考えからである。年に1度外部のギャラリーで開催している貴重書展示会、年間8～9企画程度開催している図書館内展示を継続的に実施するとともに、特別協力を含む塾外展示への出品も積極的に行うことにより、一定の成果を上げている。

一方、大学図書館として研究・教育支援は重要な使命である。研究支援については、塾内外の研究者への貴重書の閲覧・複写提供という形で長年の実績

があるが、教育支援の面で近年力を入れているのが「貴重書活用授業」である。貴重書活用授業は、教員が受講する学生と一緒に貴重書を閲覧しながら解説を行う授業のことで、書誌学、国文学、英文学や日本史学といった分野を中心に、伝統的に行われてきた授業形式である。スペシャルコレクション担当では、「貴重書活用授業」のプロモーション活動を2015年度より積極的に展開してきた。代表的な貴重書や、所蔵する古文書からとった有名な戦国武将の花押をあしらったポスターやちらしを作成するとともに、ウェブページによる広報を行った。その結果、利用件数が増加し、利用する授業の分野も従来に比べて広がりが出てきた。また、従来貴重書室内での利用に限定されていたため、制限があった利用人数に関しても、図書館内の他のスペースを有効活用することによって、多人数の授業での利用希望にも応えることが可能となった。本稿においては、貴重書活用授業の新たな展開について、利用状況の変化、利用環境の整備、利用内容の変化の3つの大きな変化を中心に、報告したい。



図1 貴重書活用授業 (貴重書室)

1 利用状況の変化

2015年度より開始したプロモーション活動が功を奏し、貴重書活用授業の申し込み件数、利用資料数は劇的に増加した。

表1 貴重書活用授業回数／延べ閲覧資料数

	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度 (4~10月)
授業回数	5回	5回	13回	15回	20回	23回
資料数	17点	23点	47点	点数不明	173点	151点

上記の表は2011年度以降の授業回数、延べ閲覧資料数をまとめたものであるが、プロモーション活動開始年を画期として、大きく変化していることが見て取れる²⁾。具体的な利用資料としては、和漢書では『百万塔陀羅尼』、洋書ではゲーテンベルク聖書 (*Biblia latina*, 42 lines.) の零葉が最も多かった。なお、2016年度は10月末の時点で既に利用授業数が昨年度を超えている。

単純に依頼件数が増えただけではなく、従来にはない分野からの利用があったことも特徴である。文学部社会学専攻、経済学部、法務研究科(法科大学院)等で一見貴重書とは無縁と思われてきた分野での利用があった。ここでは、これらの分野での実際の利用例を紹介したい。

まず、経済学部「専門外国書講読」の事例を取り上げる。穂刈亨先生による原典講読の授業で、テキストはアダム・スミスの『道徳感情論』(*The theory of moral sentiments.*) 初版(1759年)である。普段は市販されているペーパーバックのテキストを用いて輪読の授業が行われていたが、2015年度より、一部の授業が貴重書活用授業として行われている。「専門外国書講読」の貴重書活用授業は、貴重書室で所蔵している初版本をテキストに用い、日本語訳を担当する学生が初版本の前に座り、交代しながら読み進めていく形で行われた³⁾。この利用方法は、筆者にとっては青天の霹靂であった。書誌学に代表される従来の貴重書活用授業は、授業中に解説した資料や当該分野の代表的な資料を閲覧することが多く、現物を「見る」ことに重点が置かれたものであった。しかし、経済学部「専門外国書講読」の授業は「見る」だけでなく、貴重書を使ってテキストを「読む」という、より贅沢な経験を提供する授業であり、

貴重書活用授業の新たな可能性を教えられた。

文学部社会学専攻「社会心理学特殊Ⅲ」(柳瀬公先生)の授業も大変興味深いものであった。講義は情報伝達の歴史に関するもので、ゲーテンベルク聖書(複製)が利用された。ゲーテンベルクによる活版印刷が発明された15世紀の前後で、それ以前に存在した領主から限られた領民だけに通達する情報伝達方式が、不特定多数の人々へ情報を伝達するマスコミュニケーションに変化していく様子を示す参考資料として、貴重書が利用されたのであった。ここでは、資料の内容というよりも資料の存在自体が閲覧の目的となっている。このように学生が授業内容をよりイメージしやすいように貴重書を利用することは、これまであまり見られなかった形である。なお、ゲーテンベルク聖書は、資料保護の観点から、通常の閲覧や授業利用には供しておらず、公開も数年に一度展示すること限定している。そのため、貴重書活用授業では、現物を精巧に再現したファクシミリ版を利用している。

法務研究科(法科大学院)では「法史学(西洋法史)(屋敷二郎先生)の授業での利用があった。『ローマ法大全』(*Corpus iuris civilis.*) 零葉(13世紀)やモンテスキュー『法の精神』(*De l'esprit des lois.*) 初版(1748年)など、授業で受講生が担当して調べた資料について、先生が解説をされるものであった。利用方法は従来の形であるが、法曹界の実務家を養成する法科大学院の授業での利用は、分野的な広がり象徴している。これら貴重書活用授業の利用における分野的な広がり、プロモーション活動が潜在的な利用を掘り起こした結果といえよう。

2 利用環境の整備

続いて、利用環境の整備について述べることにしたい。貴重書活用授業は、これまで貴重書室の閲覧室のみに限定して行われてきた。これは資料保存を重視したため、貴重書は展示出品以外では原則貴重書室の外には出さない運用を行ってきた。そのため、貴重書活用授業での利用人数も一度に20名程度に限定され、多い場合でも2グループに分けて最大40名程度というのが上限であったが、今年度はその人数制限を超えた柔軟な対応をとることができた。きっかけは多人数の授業の利用申請である。経済学部津田真弓先生から、文学部国文学専攻で担当されている受講者約60名の江戸文学に関する授業で、貴

貴重書活用授業の利用希望をいただいた。これまでのグループ分けでは到底対応できない人数であるため、対応を検討し図書館5階の研修室を実施することとした。研修室は貴重書室と同じ図書館5階にあり、プロジェクター利用に備えて暗幕があったことから、貴重書の移動、照度の点で十分資料保存上の安全が確保できることを確認できたのである。そのほか授業該当日に研修室が空いていたこともあり、約60名での貴重書活用授業を実現することができた。当日は、貴重書閲覧用に机と椅子の配置を変更し、暗幕を閉め、照明の一部を消すことによって、資料保護の条件をクリアすることができた。それでもスペース的には、一度に最大30名が限度であったため、60名の受講者を2グループに分け、図書館1階展示室で開催中であった慶應義塾大学附属研究所 斯道文庫主催展示（「元和偃武400年 太平の美——書物に見る江戸前期の文化」会期：2016年11月4日～11月27日）と交代制で見学していただくこととなった。60人規模の授業でも貴重書活用授業を実施することができたことは大きな成果となった。津田先生には教員の立場から、貴重書活用授業を利用した感想をご寄稿いただいたので、合わせて参照していただきたい。（13ページ掲載）



図2 貴重書活用授業の設営準備（研修室）

さらに図書館1階に多目的学習室が新設され、そこでも貴重書活用授業ができる環境を整えることができた。このスペースは文字通り、資料の閲覧、オリエンテーション、貴重書活用授業や資料展示といった多目的に利用できるようなスペースとして構想が練られ、2016年1月から利用が開始されたものである。オリエンテーションでの利用を念頭に、壁面はプロジェクター投射可能なホワイトボードが設置され、貴重書閲覧や展示もできるよう、遮光カーテンもつけられた。このスペースは貴重書室で対応

するには人数が多すぎるが、研修室を利用するほど多人数ではない受講者による貴重書活用授業で利用することとなった。

多目的学習室での貴重書活用授業で最も印象に残っているのは、文学部民族学考古学専攻山口徹先生による「民族学考古学特殊（楽園イメージの歴史人類学）」の授業である。『キャプテン・クック第2回世界航海記』（*A voyage towards the South Pole, and round the world.*）初版（1777年）を閲覧したものであったが、貴重書閲覧ののち、パワーポイントのスライドをホワイトボードに投射して、歴史的な背景を伝える図版や関連資料などを提示しながら、資料解説が進められた。プロジェクターを用いた解説など、これまでの貴重書室での授業では想像もできないことであったが、ここで新たな授業形式がまた1つ可能になり、貴重書活用授業の幅が広がった事例であるといえる。「1 利用状況の変化」で紹介した「社会心理学特殊Ⅲ」もこの多目的学習室で行われた授業であった。

なお、これら研修室、多目的学習室で貴重書活用授業を実施する場合は、事前にスペシャルコレクション担当によって会場のセッティングを行い、授業中も担当者1名が付き添う形で実施している。



図3 プロジェクターを用いた貴重書活用授業（多目的学習室）



図4 ホワイトボードを用いた貴重書活用授業（多目的学習室）

3 利用内容の変化

従来の貴重書活用授業では、資料保護の観点から、資料に直接触れることができるのは担当教員のみ限定していた。学部生・大学院生も個人で貴重書を閲覧利用することは可能で、その場合はもちろん手にとって触れることができる。ただ、一度に多人数で閲覧する貴重書活用授業においては、同時に複数名が資料に手を触れることによる事故を防ぐため、このような措置を取っていたのである。

今年度、この措置を一部緩和し、資料保護に支障のない範囲で、受講する学部生・大学院生も貴重書活用授業の中で直接資料に触れられるよう、運用を変更した。きっかけは利用者からの声であり、スペシャルコレクション担当内での議論を踏まえ、原則として教員以外は貴重書に手を触れないという運用は維持しつつ、資料の現物に手を触れることが教育上望ましい授業に限り、事前に資料の取り扱いについて十分説明した上で、保存上問題のない資料に限定して直接触れることを許可することとした。

具体的には、「貴重書活用授業での資料の取り扱いについて」という文書を作成し、初回の貴重書活用授業の際にスペシャルコレクション担当の職員が口頭で説明を行い、貴重書閲覧時の取り扱いと同様の事前準備と取扱いについて教員と学部生・大学院生に注意を促している。また、職員が資料の保存状態、利用人数、授業内容等を確認した上で、手を触れても問題ない資料を特定し、担当教員の要望も確認するなど、今回の運用変更にあたっては、資料保存面で影響が出ないように、慎重を期している。

手を触れられるように運用を変更すると、すぐに目に見える変化が見られた。それは学生の反応の良さである。書誌学の授業で感じたことであるが、実際に資料に触れた学生が、これまで以上に生き生きしているのである。また、質疑応答も活発になった印象を受けた。展示ケース越しではなく貴重書を見ることができ、さらに直接資料に触れることができる。貴重書の利活用としては、これ以上ない形であり、それが学生の反応に表れたのであろう。特に、紙やベラムといった材質やその厚みなどについては、どんな説明よりも手で触れてみるのが、その特徴を知る一番の方法である。安易に手で触れることは資料保護の観点から避けるべきであるが、十分な事前準備と取り扱いに熟練した教員・担当者が見

守る中であれば、一定の範囲内で触れることを許可して問題ないであろう。これもまた一つ、貴重書活用授業の幅が大きく広がった事例であり、受講者の満足度も上昇したのではないと思われる。

おわりに

これまで見てきたように、貴重書活用授業の取り組みは、プロモーション活動が功を奏して利用が増加するとともに、分野や利用方法の面でも多様な広がりを見せている。それが可能になったのは、利用者との対話と柔軟な対応であろう。プロモーション活動は、多人数での利用や、資料に手を触れたいといった利用者のニーズの掘り起こしにつながり、その要望への対応を考える中で、貴重書活用授業の幅を大きく広げることができた。これまで実現できなかったことについても、「どうしたら多人数で利用できるか」「どうしたら触らせることができるか」というふうな発想を転換し、柔軟に考えられたことが、要望に応えられた要因ではないかと考えている。一つアクションを起こすと、こちらの想定を超える反応があり、それにまた対応するといった、いわば大きな意味での図書館と利用者との対話が貴重書活用授業の幅を広げ、奥行きを深めることにつながっている。スペシャルコレクション担当では、今後も資料保護を大切にす姿勢を堅持しながら、利活用とのバランスも考え、教員・学生と十分なコミュニケーションを取ることによって、質の高い授業支援としての貴重書活用授業を展開していきたいと考えている。

プリントコレクションの最たるものといえる貴重書をいかに生かしていけるか、我々スペシャルコレクション担当にかかる任務は、プリントコレクションの今後とも密接にかかわっている。今後も授業支援の基本的なものとして、貴重書活用授業には力を入れていきたい。貴重書活用授業の最大の魅力は、資料の現物を展示ケースのガラス越しでなく見ることができ、触ることができる点にある。これはデジタルでは決して味わえない。プリントコレクションの今後を考えると、プリントでないとできないことを念頭においた保存計画を立てることも一つの方法ではないだろうか。書庫の狭隘化の問題は喫緊の課題であり、すべてのプリントコレクションを残すことはできない。プリントコレクションでないと経

験できない、利用できない価値を持つかどうか、この点に留意しながら、将来のプリントコレクションの保存や利用を検討していく必要もあろう。

注・参考文献

- 1) 倉持隆. 貴重書. アーカイブ資料からスペシャルコレクションへ. MediaNet. 2014, No.21, p24-25.
- 2) 数で見ると三田メディアセンター. 知識の花弁 三田メディアセンターだより. 2016, No.8, p3. より作成
- 3) 穂刈亨. 貴重書を使った授業. 三色旗. 2016, No.805, p1.